



「養豚経営に 取り組んで」



養豚経営：

新潟市小杉 遠藤 明氏

私の住んでいる旧横越町小杉は、阿賀野川の下流に位置し、田園風景が広がる自然豊かな場所で、昨年3月に新潟市と合併しました。

私は、大学を卒業後、全農の研修所で半年間養豚を学び、実家の養豚業に就農しました。当時は、たくさんの子豚を産ませて、たくさん肉豚を出荷しようと意気込み、夢と希望を胸に養豚の世界に入りましたが、理想と現実のギャップに戸惑い、父とよく言い争いになったことを覚えています。その父も私が就農後、わずか1年半で他界し、私がいきなり一家の大黒柱となって家族を養っていかなければならなくなった時は、もう死にものぐるいで働き続けたものでした。その2年後には私も結婚し、現在では水稲280アールと母豚55頭規模の一貫経営を妻と2人3脚で行っています。豚舎の周辺は田んぼばかりと言っても、そこには徐々に都市化の波が迫っており、臭いへの対策が必要不可欠かつ急務となっています。浄化槽の設置や堆肥舎の整備など、できる限りの努力をして改善をしていますが、一般住民の方にとっては、まだまだ臭いと感じることでしょう。やはり、今まで以上に細心の注意を払って経営を継続することが必要だと自覚しております。

私は畜産協会の経営診断を受診していますが、年によって成績が良い時と悪い時があります。近年はあまり芳しくない傾向が見られますが、農協や農業振興事務所、家畜保健衛生所など周りの皆さんの協力もあり、なんとか成績向上の糸口が見え始めてきました。将来は、地元の消費者の方に美味しい豚肉を食べてもらうことはもちろん、堆肥を田んぼに還元し、有機米を栽培できたらいいと考えています。そのためには、私個人だけでなく、地域ぐるみでの活動、意識の統一化が必要だと思っています。現実に向けて、地域の仲間たちと手を取り合いながら努力を続けていきたいと考えています。

「酪農を志して」



酪農経営：

佐渡市赤泊 本間 靖芳氏

10年間のサラリーマン生活に終止符をうち、32歳の春、ふるさと佐渡に帰郷した。既に27年が経過した。帰郷当初は米でも作りながら適当な職場でも、見つけて兼業農家としての生活を思い描いていたが、望むような職場もなく就職の機会も得られないまま、ぶらぶらとしていた。近くの和牛農家の見学やら手伝いをしているうちに、多くの人に勧められ専業農家としての道を模索するようになってきた。当時、私の住む地域では若い後継者がいる経営は酪農家に多く、彼らの話を聴いているうちに酪農経営への志向が固まってきた。

昭和54年に20頭牛舎を建築し、経営をスタートさせたが仲間に支えられながら苦難の道に乗越え、現在35頭規模の経営に到達した。酪農経験が全く無かったため多くの仲間に迷惑をかけ、中でも無知による不十分な管理下に置かれた牛達が一番の被害者ではなかっただろうか。そんな中で畜産コンサルに出会い長年、診断を受け飼養管理技術、経営ノウハウ、また飼料作物の栽培技術など多くの指導助言を得た。現在まで経営を継続し、牛歩の歩みではあるが発展途上にあるものもコンサルのお蔭ではないかと思っている。今後も機会あるごとに指導を得ながら、最も苦勞をかけた牛達へ報いるためにも、住環境の整備とカウ・コンフォートに重点を置き、牛床の整備、飲水施設の整備、暑熱対策等、牛が安心して泌乳活動が出来るようにしていきたいと思っている。近年、牛乳の消費が低迷し、来年度より13年ぶりの抑制的計画生産が実施されようとしているが、生産者が出来る消費拡大への手段は新鮮、安全、安心でおいしい牛乳を生産することであり、そのためにも牛が安楽に生産活動が出来るような環境を提供してやるのが重要ではないかと思っている。佐渡でも酪農家戸数が半減してきているが、少ない仲間ながら共に山積している課題に、意欲的に挑戦して消費者に喜ばれる牛乳の生産に取り組んでいきたい。